

# 未来都市、青森の夢

南 一 誠  
芝浦工業大学名誉教授



この度は、『青函「考」路』に寄稿する機会をいただきありがとうございます。どうぞいませ。まず自己紹介をさせていただけますと存じます。私は今から25年以上も前になります。平成8年（1996年）の夏に着手したJR青森駅近くの「青森郵便貯金地域文化活動支援施設」（通称、ぱるるプラザ青森、現在は青森市民ホール）の基本設計を担当しました。その後、実施設計、工事監理など、施設が完成するまで、ほぼ一貫して従事することになり、青森市の多くの方々

大変お世話になりました。施設が完成した後、郵政民営化に伴い、施設が青森市に移管されるなど、当初、想定していなかったこともありましたが、青森の皆様の温かいご配慮のおかげで、今日に至っていることを心から感謝しています。とりわけ、当時の佐々木誠造青森市長様、佐藤健一助役様、和田司秘書課長様には、一方ならぬご支援を賜りました。改めて御礼を申し上げますと存じます。

が経過し、施設が計画されるに至った経緯を知る人も少なくなりましたので、ぱるるプラザ青森の設置経緯などを述べてさせていただきますと存じます（写真①・②）。ぱるるプラザ青森は、山口、京都、千葉、町田につぐ全国で5カ所目の郵便貯金地域文化活動支援施設として計画されました。一連の地域文化活動支援施設は、地域住民の方々が豊かな学習、文化、余暇活動等に多目的に利用できることを主な設置目的としています。民営化する前の郵政省が、郵便貯金

特別会計の運営経費で建設し、認可法人の郵便貯金振興会に運営管理を委託していました。「ぱるる」とは英語の「Pair（友人・仲間）」にちなんだ造語で、郵便貯金総合通帳の愛称です。施設名には地域の皆様が自由に集い、友人としての交流の輪を広げていただきたいという意味が込められていました。

❖施設の計画に関して青森市の皆様からいただいたご意見  
一番初めの動きとして、平成4

年（1992年）11月に郵政省の  
出先機関である東北郵政局貯金部  
が青森市に対して「地域文化活動  
のための施設」設置計画について  
概要説明を行っています。翌平成  
5年には民間のリサーチ会社、三  
井情報開発（株）総合研究所が市  
内の類似施設の立地状況、使用状  
況を調査すると同時に、地元自治  
体へのヒアリング、地元のオピニ  
オンリーダーへのヒアリングおよ  
び一般市民へのアンケート調査を  
実施しています。



① 岩木山とばるるプラザ青森（青森市民ホール）

青森市からは、青森市文化会  
館（2185席）と青森市民文化  
ホール（565席）の中間の規模  
のホールが求められていること、  
世界の北方圏の都市が集まる「北  
方都市会議」や青森、函館、下関、  
北九州の4都市が開催する「海峡  
フォーラム」などの会議が行える  
国際交流会館的な大規模会議施設  
や研修センター的機能を持つ施設  
の必要性があること、駅周辺の駐  
車施設は地下駐車場や駐車場案内  
システム等の整備により中期的に



② 青森駅前とばるるプラザ青森（2001年頃）

は不足しないと予想されること、  
スポーツは自然の中で気軽に楽し  
める環境にあるのでフィットネス  
クラブの需要は高くないこと、青  
森らしさという面では「木」に対  
する関心が非常に高いことなどの  
意見をいただきました。

地域のオピニオンリーダーとし  
て、青森商工会議所、青森県カー  
リング協会、青森県婦人スポーツ  
連盟、青森市文化団体協議会、青  
森市PTA連合会、地域婦人団体  
連合会、青森市老人クラブ連合会、  
青森市体育協会、婦人団体連絡協  
議会、婦人学習集団「椿山会」、  
青年会議所、青森市町会連合会、  
青森市子ども会育成連絡協議会の  
役員の方々にヒアリングをさせて

いただきました。その結果、市内  
に適当な規模の会議施設がない、  
文化会館だと大き過ぎ文化ホール  
だと小さ過ぎることがある、きち  
んとした舞台のついた中規模の  
ホールがほしい、1000人規模

の集まりでも全体会議と分科会が  
できる施設が欲しい、音楽や楽器  
の練習などに自由に使える施設が  
欲しい、車を運転しない高齢者の  
ための集会施設が欲しい、茶道、  
華道ができる和室が欲しい、生涯  
学習の展示ができるギャラリー施  
設が欲しい、運営に工夫を凝らし、  
利用日・利用時間を柔軟にする、  
夜自由に使える施設にする、地域  
の人、旅行者など誰でもくつろげ  
る場所にする、駅前には車が混雑す  
るので、駐車場は作らず建物を大  
きくする、施設に「木」を用いて  
「森・青森」を象徴するようなも  
のにして欲しいなどの意見をいた  
いただきました。

平成5年（1993年）7月26  
日から8月13日に18歳以上の青森  
市民7000人を対象に単純無作  
為抽出、郵送法によるアンケート  
調査も行っています（有効回答数  
130、回答率18・6%）。その  
結果、現在行っている余暇活動に

ついでには音楽鑑賞(14・1%)が最も多く、今後新たに行ってみたい余暇活動としても、音楽鑑賞(コンサート等)(18・2%)、絵画・書道(18・2%)という回答でした。余暇活動に求める楽しみや目的については、健康や体力づくりのため(52・9%)、人との交流のため(52・9%)、日常生活と違った気分を味わうため(42・4%)であり、余暇活動を行う場として利用したい施設については、多目的ホール(劇場、音楽ホールを含む)(48・5%)、カルチャースタター(17・7%)という内容でした。

平成5年(1993年)6月には青森市連合町会長等から郵政省に対して、公民館機能を持つこと、旅行者が休める所にする事、棟方志功など地元画家の作品展示コーナーを設置すること、建物前面をガラス張りにすることなどからなる要望・提案が提出されています。

平成5年10月、郵政省、東北郵政局、青森市の打ち合わせが行われ、青森市としては1000人規模のホールや前面歩道の融雪を望んでいることが示されました。また平成5年12月に行われた東北郵政局貯金部と青森市の打ち合わせで、青森市側からプールについては近隣に施設があるので郵政省の施設には不要であること、青森市にはイベントホールとして2000人規模及び500人規模のものがあるが中規模の1000人規模のイベントホールがなくその設置が望まれているとの意見が示されています。平成6年(1994年)9月、地元関係者と郵政省貯金局、郵便貯金振興会の打ち合わせが行われ、施設概要について意見交換が行われました。

これら地元の皆様との意見交換を踏まえて、平成6年12月、東北

郵政局貯金部から郵政省貯金局に對して、文化施設として、地元ニーズに合致すること、青森県の特徴を織り込むとともに、青森市の発展につながる事、幅広い階層に利用されること、郵便貯金の周知宣伝施設としてふさわしいこと、健全経営が可能であることを基本的視点とした施設内容(案)が提出されました。その際、施設に青森ヒバを使用することも提案されています。

平成7年(1995年)8月、郵政省貯金局と青森市の間で具体的施設内容について打ち合わせが行われました。郵政省から、施設コンセプトは青森市に相応しいものにする事、施設内容として郵便局、暮らしの相談センターの他、多目的な用途に対応できる施設とすること、フィットネス施設については市内にある民間施設への影響が懸念されること、駐車施設は付置義務駐車台数程度とするこ

と、運営は郵便貯金振興会が補助金等を受けずに独立採算で行うことなどを説明しました。青森市からは、青森市に無い中規模の多目的ホールを強く望むこと、多目的ホールは音楽の専門家の要望に対応できる固定席とすること、会議、研修施設にあわせてカルチャースタターを是非設置して欲しいこと、町並みの景観向上を重視していること、雪対策について検討することなどの意見・要望が出されました。

この打ち合わせを受け、平成7年9月、青森市から郵政省貯金局に對して、正式な要望書が提出されました。その概要は、建設地は駅前(立地し、青森市の顔と呼べる場所である事)から、「青森市景観形成ガイドライン」に沿った魅力あふれる形状、色彩等の建物とすること、青森市では冬季における快適空間の創造を進めており、建物が面する歩道については融雪をおこなうこと、導入施設と

しては800～1000席の固定席の中規模ホール、コミュニティセンター、情報プラザ的施設等とすることでした。

東北郵政局は地元の要望等を踏まえ、平成7年11月、平成8年11月に郵政省貯金局に対して施設内容に関する具体的要望を提出しました。郵政省は地元施設概要を説明するため、工事発注前の平成10年（1998年）6月10日、および工事期間中の平成11年（1999年）6月25日に青森市で説明会を開催しています。

### ❖用地取得、基本計画

平成5年（1993年）9月30日、東北郵政局は日本国有鉄道清算事業団より青森市柳川一丁目の用地を2869・84㎡、取得しました。この敷地は、かつては青函連絡船へ列車を引き込む鉄道線路敷があった場所ですが、連絡船の廃止に伴い処分の対象となった

ものです。青森を含む全国10箇所

の郵便貯金地域文化活動支援用地は、すべて清算事業団から取得したのですが、実は事業団が処分を試みたものの売却できなかった土地を郵便貯金の資金で取得することになったものです。どなたも購入されなかった土地は道路への接続が悪いなど、いろいろと課題が多く、要望された施設機能を実現するため、設計では大変苦労することになりました。青森の建設予定地は当時、準工業地域に用途指定されており、中規模ホールを建設するには平成8年度に予定された商業地域への変更を待つことが必要でした。

平成6年（1994年）夏、郵便貯金会館（メルパルク）などの管理運営を担っている郵便貯金振興会に企画本部が設置され、実際の施設運営の経験に基づき、今後新築する郵便貯金周知宣伝施設の施設計画の原案を、収支予測をも

とに作成することになりました。メルパルクなどの郵便貯金周知宣伝施設は郵政省が設置し、郵便貯金振興会が運営する「公設民営」の事業方式を取っていましたが、実際に運営する立場の郵便貯金振興会が基本計画の段階から参画することにより、独立採算で行っている運営をより健全化したいというところが、背景にありました。新しく建設するばるるプラザ青森について、地元からの要望に収支予測を加味して、施設内容を検討する作業が行われることになりました。基本的には個々の施設ごとに収支相償となることが原則ですが、ばるるプラザ青森はホールの支出を補う収益部門が計画されていません。設計着手時には、宴会場としても使える500㎡の大会議室等を設けて収益性を向上させることも検討されていましたが、地元企業との関係を重視して設置しないことになりました。そ

の結果、ばるるプラザ青森は年間4300万円ほどの赤字になり、仙台メルパルクなど全国各地にある他の郵便貯金周知宣伝施設の余剰金でその赤字を補う方針が示されました。しかし最初から赤字が想定される施設を建設した前例はなく、設計業務を進めるうえで多くの困難に面することになりました。

郵政省本省の建築部門では、平成8年（1996年）夏に基本設計に着手し、平成9年度および10年度に実施設計と積算を行いました。前述した通り、私が参画したのは平成8年の夏からです。基本設計の最終段階において、施設管理・運営を行う郵便貯金振興会から事業収支を改善するため、管理運営費、光熱費等を大幅に削減したいという要望が提出されました。削減額が非常に大きく、建物の仕様の調整程度では到底、実現することが困難と思われたため、

設計者である私から計画規模を見直し、当初多目的ホールの上部(5階)に計画していた大会議室を取りやめることを提案しました。大会議室の中止に伴い、地下2階に計画していた付置義務駐車場も不要になるため、計画規模面積が16000㎡から11500㎡に縮小され、建設費と完成後の管理運営費、光熱費等が大幅に縮減できます。基本設計が始まってから、事業規模を大幅に変更することは前例がないことですが、購入した敷地が狭く16000㎡の施設を計画するには無理があると感じていたため、この方針変更が実現して、結果的には良い結果になったと思っています。

多目的ホールの仕様については設計段階において、改めて郵政省と青森市の間で協議を行っています。青森市の関係者の皆様には郵政省が設置した既存のホールを実際に見ていただき、青森市にある

既存ホールの利用実績や今回建設する施設の建設工事費、予想される管理・運営経費等を踏まえて、段床の固定席としながらも、一部分を稼働席として演劇とコンサート、大会等の双方に対応できる仕様とすることを決定しました。基本設計がほぼまとまった平成9年(1997年)1月には、郵政省の施設に対する意見を地元商工会議所、青年会議所、郵便貯金利用者などの会などを対象にヒアリングし、地元の意向の最終確認を行いました。

### ❖ 中心市街地活性化に

#### 貢献する建築設計を目指して

青森市の中心市街地は、地理的に扇の要に位置し、古くから商業、業務、行政等の機能が集積する中核エリアを構成してきた地区ですが、全国の多くの地域で見られるように、商業施設や住宅の郊外立地に伴い、商業機能の低下や空洞

化などの問題が生じています。

青森駅、駅ビル、郵政省の地域文化活動支援施設、清算事業団の処分予定地からなる4haは、青森駅地区計画により「高次の文化施設と商業業務施設を誘致し、土地の有効利用を図る地区」として位置づけられていました。ぱるるプラザ青森は、当時青森市が進めていた市民図書館を核施設とした駅前再開発ビルと一体となつて、青森駅前のゲート機能を担い、中心市街地の活性化に寄与することを目標として計画されました。

#### 建築設計としては、積雪寒冷

地の文化施設に相応しい「暖かみ」と「現代性」を感じさせるデザインとしました。青森駅方面からのアプローチに面する建物のコーナーは、滑らかに壁面を連続させて、柔らかな表情を醸し出しています。建物の正面も、緩やかに大きく円弧を描いており、文化施設



③ ぱるるプラザの夜景  
(2階ホールホワイエの様子が見える)

らしい優美さと北方都市の施設に求められる温もりを演出しています。夜間は建物の正面にある大きなガラス窓からホールホワイエの華やかな賑わいが青森駅前の都市空間に溢れ出し、市街地に賑わいをもたらすことを目指しました(写真③)。雪国に相応しい暖色系のタイルの色は青森駅ビル「ラビナ」のデザインとの連続性を意識したもので、駅前広場を構成する建築物としての景観の調和を心がけました。

青森市は人口30万クラスの都市としては世界屈指の降雪があります。冬季の雪庇対策としてパラ

ペットの笠木等の必要な箇所に融雪設備を設けています。壁面に設置したガラリが雪で目詰まりを起こさないように、5階にある機械室の外壁面にチャンバーを設け、外壁パネルのスリット（6ミリ）から空気を出入れすることにより風雪対策をしています。設計をしていた時期に、南側の隣地にホテルが計画されるといふ話をお聞きし、プライバシーを確保するため、南側壁面には大きな窓を設けないことにしたのですが、その後、そのような計画が動き出すことはありませんでした。

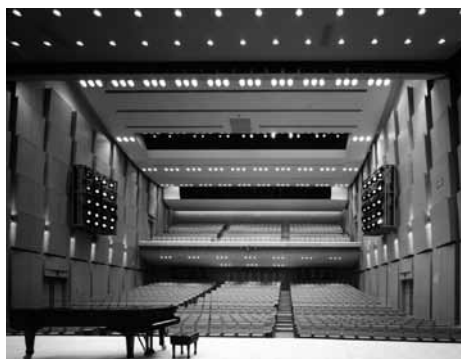
1階にある円い平面をした郵便局と赤い外壁タイルは「青森りんご」のイメージです。玄関ホールに入れば、すぐに2階のホールの入り口につながる階段があります。敷地が狭いため、2階のホールと1階のエントランス部分のつながりを良くして、一体的に使えるようにしました。

ホールの音響設計においては、敷地がJRR東北本線線路敷に隣接しているため、鉄道振動がホールに伝播するのを防ぐための防振対策が重要でした。防振のため、線路敷と建物の地階躯体との間には厚さ50mmの防振ゴムを設けています。鉄道と建物の距離が近いので、建物底部からの音の回りこみを防ぐため、根切り底にも防振ゴムを設置しています。併せてホール全体に浮き床構造を採用しており、ホールが建物の躯体から縁を



④ 多目的ホール（コンサート時のステージ廻り）

切った形になっています。ホールには可動式のプロセニアムが設置されています。コンサート時は、プロセニアムアーチをホールの側壁とし、上部はフライオフトに格納することにより、舞台と客席の視覚的、音響的な一体感を確保しています（写真④）。演劇時はそれらを引き出すことで、広い舞台としつかりしたプロセニアムを構成することができます。舞台前面の客席5列を舞台下に収納し、その部分を「前舞台迫り」とするこ



⑤ 青森ヒバを用いた多目的ホール

とで、演劇時には舞台奥行きを7間に拡大することもできます。

「青森らしさ」を表現する素材として、ホールの内装全面に津軽半島北部の青森県三厩町増川の青森ヒバを採用しました（写真⑤）。青森県工業試験場漆工部長

（当時）の九戸眞樹氏から紹介をいただき、津軽塗りにについては伝統的技法を用いながらも新しい津軽塗りの表現を目指している游工房の久保猶司氏に制作を依頼しました。津軽塗りはエレベーターの乗り場扉、施設案内サイン、2階ホワイエの入口扉、柱飾り、ドアハンドル、手すりに使用しています（写真⑥）。弘前在住の武田孝三氏には、ぶなの木を薄くスライスしテープ状にしたものを編んだ「ぶな子細工」をお願いしました。レストランパーティション、レストラン照明に使用しています（写真⑦）。前田セツこぎん研究会の前田章子氏らに「こぎん刺し」の

制作を依頼し、レストラン窓際のロールスクリーンの裾模様に使っています。

ホールの緞帳については、東北郵政局が主催する2段階コンペで原画と製作者が選定されました。平成12年(2000年)10月に原画制作のコンペが公告され、

平成13年1月に実施された審査の結果、青森市出身の画家、山内ゆり子氏の作品「ALL TOGETHER」が選ばれました。次に



⑥ 久保猶司氏が制作したホール入り口の津軽塗の扉

織物業者選定のための試し織りコンペが実施され、京都の(株)川島織物が選定されました。山内ゆり子氏の津軽の風景を題材にした明るい色彩の緞帳は、ビバの木の風合いと相まって、ホール全体を明るく、温かい雰囲気にしていきます(写真⑧)。

#### ◆工事および完成・開業、

#### 青森市への移管

工事は平成10年(1998年)



⑦ 武田孝氏が制作した  
フナコ細工のレストランパーティション

11月11日に着工しました。鉄骨建方が丁度、着工約1年後の平成12年冬に当たり、氷点下での高力ボルト締め作業となりました。工事は約30ヶ月の工期を経て、平成13年(2001年)5月6日に完成、5月18日に引き渡されました。1階にある郵便局は平成13年5月28日に業務を開始し、その他の部分については、備品搬入等の作業後、平成13年9月29日に開業しました。



⑧ 山内ゆり子氏が原画を製作した緞帳  
(劇場として使用する時)

ばるるプラザ青森の完成と相前後し、平成13年(2001年)1月、中央省庁再編により郵政省の郵政事業部門は郵政事業庁になり、平成15年(2003年)4月には日本郵政公社に再編されました。日本郵政公社は平成19年(2007年)10月1日に実施される郵政民営化の1年前の平成18年(2006年)10月、町田・岐阜・山口に建設された他のばるるプラザと共に、ばるるプラザ青森を廃止しました。しかし、ばるるプラザ青森については、同年12月、青森市が取得して、運営を継続していただいています。青森市では経年が進んでいた青森市民文化ホールを2007年6月30日に閉館し、ばるるプラザ青森を青森市民ホールとして使用することにされました。他のばるるプラザがその後、活用されていないことを考えると、迅速にかつ柔軟な発想で、対応していただいた青森市の

方がたに心から感謝しています。民間企業における豊富な経験をもとに、真に市民が求めるものが何かを考え続けて都市経営を進めておられた佐々木誠造市長様とそれを支えておられたスタッフの皆様だから実現したご英断だったと思います。

## ◆青森の未来

ばるるプラザ青森の開業より少し早い、平成13年（2001年）1月、駅前再開発施設のアウガが開業しました。郊外の市民図書館を駅前に移転し、若い人を中心市街地に呼び戻した効果は大きく、コンパクトシティを目指す施策の成功事例として全国の注目を集めています。駅前商店街の空き店舗を広場にしたり、パサージュ広場も新しくビジネスを始めたい事業者を応援する仕組みとして、話題を呼んでいました。これらの施設も、ばるるプラザ青森と同じように、その後、厳しい経済状況や社会情

勢の影響を受けて、いろいろな苦労があったように拝察します。しかしまちづくりは時間がかかるものです。粘り強く、市民が一体となって取り組んでおられる青森は、必ず素晴らしい街として発展するものと信じています。

日本の都市は、自由な開発を行った結果、広域にスプロールしてしまっており、人口減少と高齢化が進む中、社会資本の維持管理費を負担し続けることが難しくなっています。冬の除雪に大きな負担が生じる青森では、限られた税収を福祉、教育などに有効に使うためには、コンパクトシティ化への取り組みは不可欠だと思います。近年、世界的に議論が盛んな都市の脱炭素化、カーボンニュートラル化は将来の世代のために必ず実現しなければならぬ目標だと思います。陸奥湾の水質改善のため下水道整備に取り組まれ、都市の生活と自然環境の両立に先導的に取り組んでこられた青

森市は、これからもまちづくりや環境保全の面で、日本をリードされると思います。

建築の分野では、カーボンニュートラル化を進めるため、都市の建物を木造で建設するための研究開発に取り組んでいます。青森は豊かな自然環境に恵まれており、青森ヒバを建材として活用することが期待されます。ばるるプラザ青森のホールは内装に青森ヒバを使用しましたが、当時の防耐火基準では、木材は限定的に使用することしかできませんでした。ねぶたが巡行する青森市の中心部には、大きな植樹帯を防火帯として計画し、木造建築がつくる街を実現してはどうかでしょうか？これから100年先の街を考えた時、コンクリートや鉄でできたビルが林立するのではなく、木の温もりが感じられる建物と緑あふれる緑地で構成される街が実現することを夢見たいと思います。苦勞をさ

化が進む中、今後どのような状況になるのか予断を許しません。除雪作業をするロボットや空を飛ぶタクシー、ドローンによる物流が近い将来は実現し、大きく私たちの生活を変えることになるかもしれません。そのような未来の姿を先取りした都市経営に取り組んでいかれるなら、世界中の人が10年先、20年先の未来の姿を見るために青森を訪れることになるのではないのでしょうか？私が青森の皆様と一緒に仕事をさせていただいた経験から、青森の人にはそのような明るく、革新的な未来を実現する力が、満ち溢れていると感じています。

みなみかずのぶ

1956年生まれ、東京大学およびマサチューセッツ工科大学大学院修了、博士（工学）、一級建築士、1981年から2005年まで郵政省大臣官房建築部、建設省官庁営繕部などに勤務、2005年から2022年3月まで芝浦工業大学建築学部教授。